自然賛歌

瀬戸の滝と細見谷

妹尾　治人

廿日市市は、平成一五年三月一日に吉和村・佐伯町と合併した。このことにより北は島根県（匹見町）、西は山口県（錦町）に接する県境まで広がった。

そこで今回は、中国山地の秘境といわれる「瀬戸の滝と細見谷」を訪ねてみた。

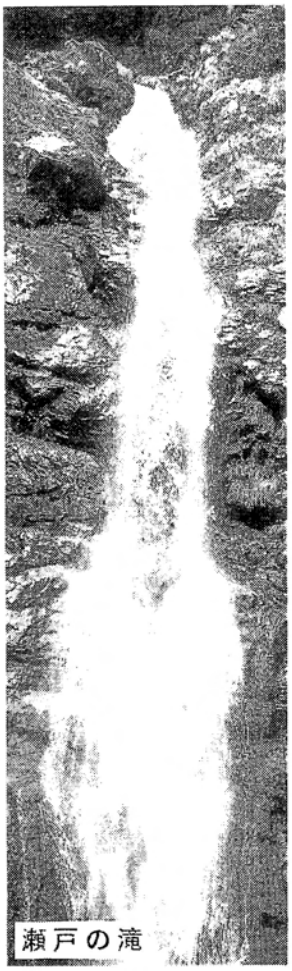
国道一八六号線を、吉和郵便局の所から戸河内線に入り、廿日市市吉和支所（旧吉和村役場）を右に、ウッドワン美術館を左に見て、なお北進する。

約五㎞で「瀬戸の滝」入口に到着。そこに案内板があり「瀬戸の滝まで八〇〇m」とあった。

十方山（標高一、三一九m）を源流とする瀬戸谷川に添って、山道を登って行くと、そこに想像もしなかった雄大な滝が現れた。

「瀬戸の滝」は二段になっていることから「咬龍の滝」とも呼ばれている。滝の上段は一九m、下段は二八m、見事な滝で、水量も豊富で、滝壺もとても広く深い。人影もなくただ落ちる滝の轟然たる音を聞くのみ……。

滝は下って瀬戸谷川となり、やがて吉和川に合流し、立岩ダムに注いでいる。



瀬戸の滝

「瀬戸の滝」入口の広場から、一㎞程、もと来た道を引き返した所に、立野キャンプ場入口の道標がある。そこから道を少し上ると、細見谷川と吉和川の合流点にさしかかる。

そこに立野キャンプ場とヤマメ養殖場があった。細見谷橋を渡り、川添いの山道をさかのぼってみた。道幅は狭く車では通れない。

この山道は、かなり荒れ道で、数ヵ所崩れたまま、倒木も多くて、とても歩ける道ではなかった。

それでもその山道を歩くこと約三㎞。もうやがて十方山林道と出会うはずだがと思いながら、時間がないことから引き返した。

別の日に、今度は二軒小屋から細見谷川添いの十方山林道を下ってみた。

十方山林道は舗装こそしてないが車はどうにか通れる。マウンテンバイク数台が群れをなして走り抜けていった。

この林道は、この先で国道四八八号線（吉和⇔匹見間）に出会う。今日、開発計画が問題になっている大規模林道とは、どうやらこの辺りのことらしい。

渓畔林とは川辺に育つ林のことである。渓畔林では、地表流・中間流・地下水流・伏流水といった豊富な水資源を受けて、自然豊かな植生と生き物が見られる。細見谷川渓畔林で見受けられる特徴的な植物は、ブナ・トチノキ・サワグルミ・オヒョウ・ミズメ・ハイイヌガヤ・ツルアジサイ・チュウゴクザサ・ハリギリ・イヌブナ・イタヤカエデ・ナツツバキで、動物では、クマタカ・小型サンショウウオ・イノシシ・ツキノワグマの生息が確認されている。

近年、山が見直され「海の日」にちなんで、「山の日」（六月第一日曜日）を制定しようという運動が全国的に展開しつつある。

広島県では「山に親しむ、山を楽しむ、山に学ぶ」をテーマとして、「山の日県民の集い」が平成一四年から実施されている。第一回は東広島市西条町龍王山憩の森で、同年六月二日に行われ参加者は一五〇〇人であった。

「第二回、山の日県民の集い」は、廿日市市吉和もみの木森林公園で平成一五年六月一日に開催され、参加者は三〇〇〇人。（中国新聞社発表による）またこの会には、瀬戸内

海国立公園と西中国山地国定公園の二つを持ち合わせた地元廿日市市、山下市長の山を愛する力強い挨拶があり、会は華やかに盛大に行れた。「第三回、山の日県民の集い」は、平成一六年六月六日、広島市東区福田、緑化センターで行れる予定である。

こうして、山との共生が見直される気運の中で、緑資源公団の細見谷大規模林道の開発計画が発表された。対して「廿日市の宝、細見谷」のシンポジウムが平成一五年八月一六日、廿日市さくらぴあホールで開催された。

そして農林水産大臣と環境大臣宛の「細見谷大規模林道反対」の三九、〇三二名の署名簿が作成され一二月二五日に提出されている。

一方、この計画は「森林・山村振興の架け橋」だとして、地元は早期着工を願い、整備促進の看板が立てられている。

しかし、細見谷渓畔林は、廿日市市の宝である。自然を壊さず、地域も生きる道を考えなくてはならないが、それには、

一、開発は大規模は避け、最小限とし、

二、自然に優しい工法＝水を通すコンクリート舗装・魚が住めるよう自然石による護岸など

広く叡知をあつめて、よく検討されることを望む。この美しい細見谷渓畔林を後世に残し、自然観察の学びの場として、永くその保存に努めていただきたいものである。

（自然観察指導員）

"水の里　自然豊かな　細見谷"　【完】

整備促進の看板

廿日市の民謡（一一）
わらべ唄
大嶋　敦子

「廿日市の民謡」は早く上梓され、廿日市市教育委員会で売られている。一、八五円

♪羽根つき唄

伝承者＝廿日市市上平良
故　田能ヤチヨさん
（明治三五年生まれ）

①
ひとえにふたえ　見渡しゃ嫁ご
迎えにごんせ　七度、八度（ナナタビ、ヤタビ）
これで九つ　十いの（トオイノオ）

嫁が内緒で実家に帰り（ホボロをふる）婚家から「迎えに来てほしい」という唄らしいと話された。

伝承者＝廿日市市上平良
有田チエ子さん
（明治四四年生まれ）

②
ひいやふう　みいやよう　いつむう
ななやあ　何の薬師　薬師の小路で
羽根つきゃ　かかる
ひいやふう　みいやよう

松山出身の越智フジ子さんも、同じ唄であったと話された。

♪手鞠唄

伝承者＝廿日市市宮内砂原（原、川末生れ）
故　川岡キヨ子さん
（明治三九年生まれ）

①
てんてんてまりの　言うことにゃ
あねさん来んさい　奉公しょう
奉公ぶりにゃあ　何奉公
ちゃんちゃん茶釜に茶ついで
とっさんかかさんお日なりよ
起きてまま（飯）くって髪結って
でんでん寺に　詣りましょう

花嫁が＼心情
でんでん寺の
あんまりしんじょ（根性）が悪うて
お鉢に三杯　汁かけて
三口四口に　かけこんで
それでも足らんか　きたろうの
……［以下不明］

伝承者＝廿日市市宮内
故　中川アキヨさん
（明治二九年生まれ）

②
てまりとてまりが　行きおって
中のてまりが　言うことにゃ
あねさん奉公　しょじゃないか
奉公しょうにゃあ　何奉公
ちゃんちゃん茶釜に茶ついで
一反織れば　日が暮れる
二反織れば　夜が明ける

③
西や東の　げん太郎さんが
お馬に乗りかけ　馬から落ちて
竹のよぼしで　手のはら突いて
医者に行こうか　目医者にいこか
医者もいらんが　目医者もいらん
わたしゃあなたの　妻じゃもの